

# 帯広市「あいのりタクシー」

## ドア・ツー・ドアで住民に、BDF で環境に優しい新しい公共交通

便数が少なく不便で、停留所も遠い農村部の路線バス。がらがらの状態で、たくさんのガソリンを使い走っていく姿に、疑問が生じ新しい取り組みへ。それが帯広市大正地区で始まった、各戸送迎のデマンド型「あいのりタクシー」です。平成16年4月から本格的に運行が始まり、現在はバイオディーゼル燃料（BDF）でエコロジカルに走行中。新しい公共交通システムのあり方を提案しています。

### 散居型農村部の高齢者は 外出も一苦勞？

帯広市のバス利用者数のピークは昭和55年。約1,764万人だったのが、平成19年には399万人まで減少しています。27年間で利用者数は約4分の1にまで減り、ここ10年でも約半分という厳しい状況です。なにも



帯広市商工観光部  
商業まちづくり課経営支援係  
山本哲矢主任補

もこれは帯広市だけに限ったことではなく、どこの自治体でも利用者数は減少するも、住民の足を確保しなければならないという問題に直面しています。

また農村部などはバス利用者の多くが高齢者で、冬でもバス停まで2、3キロ歩かせることも珍しくありません。しかも本数は最低限。家族の車による送り迎えではなく、誰の手も煩わせることなく自分の足で買い物に行ったり、友人宅を訪ねてみたい。そうした高齢者のニーズがあるにもかかわらず、実情にそぐわない、従来通りのバス運行で果たして良いのだろうか？



大正交通株式会社  
道見茂美代表取締役

そうした疑問がおこっても無理はありません。ジャガイモのメークインが特産品である帯広市大正地区の場合、平成14年10月の時点で市町村生活バス路線3路線が1日2往復。3路線の輸送量（1日1km当たりの輸送人員）は、合計4.8人でした。

帯広市は平成13年度から「帯広市バス活性化基本計画」の中で、農村部における交通システムのあり方を議論し、平成15年7月から翌平成16年3月まで、運行を地元のタクシー業者である大正交通有限会社に委託し、相乗りするデマンド型「あいのりタクシー」の実験を行いました。原則としてジャンボタクシーを使用し、大正地区全域をエリアに運行ルートを設定せずドアからドアへ。出発時間のみ設定し、利用者は出発の30分前までに予約。運賃は500円均一でした。足腰の弱い高齢者一人でも家と目的地の間を送迎してもらえるので体への負担が少なく、運賃も一定。これにより外出がしやすくなり、送り出す家族も安心。平成16年4月からは本格運行となりました。運行委託は大正交通で継続されています。



高齢者の体への負担を軽減するため、ステップが自動的に出る

「実験の結果、病院や商業施設など市街地に向かう人が大半であることが分かりました。当初は大正地区にエリアを限り、あとは路線バスに乗り継いでいただいていたのですが、接続を円滑に行うためにはいろいろ問題もあって。そこで平成18年10月から市街地に入るようルート変更をし、500円の均一料金から、距離によって運賃を変えたところ、利用者数も伸びました」と説明する帯広市商工観光部商業まちづくり課経営支援係の山本哲矢主任補。本格運行の平成16年度には1,054人だった利用者は翌平成17年度は1,192人と僅かな伸びでしたが、市街地まで乗り入れられるようになった平成18年度は4,047人（対16年度比61%増）と、大きく上昇しました。利用者には事前の登録を願っており、老人会などへ出かけPR活動も行っています。平成18年度の登録者数は454人（対16年度比46%）と認知度も高まり、新しいかたちの公共交通としての地域に浸透してきたことが、数字からも判断できます。

## 廃食油も大事な資源。 ぐるっと回って花の街へ

大正地区の「あいのりタクシー」はシステムに限らず、燃料にバイオディーゼル燃料（BDF）を利用し、環境に優しい運行を行っている点も新しい取り組みといえそうです。

大正交通有限会社の道見茂美代表取締役は「車内に廃食油の回収ボックスを設けています。ご家庭で天ぷらなどをして使い終わった植物性の食用油をペットボトルに入れていただき、乗車される時に回収ボックスへ。はじめのころは、集まるかどうか心配でしたが、最近ではエコロジーに対する認識が高まっていることもあり、予想以上の反響です。豊頃町にあるエコERC（エルク）という会社では、道内最大規模のBDF工場を稼働させており、BDFによる運行の環境も整いました。また農家の方にナタネを栽培していただき、エコERCでは食用油を搾った後にカスが出るので、家畜の飼料にしたり、発酵させて肥料にもしています。無償で使用済みの天ぷら油をいただいているので、将来的にはお返しにこの肥料を差し上げ、花壇にお花がいっぱい咲ききれいな街づくりに貢献できれば。そんな循環型社会のお手伝いをしていきたいですね」と、環境問題に熱意を注いでいます。

「アンケートによると、廃食油に関心のある人は、公共交通にも関心があるという結果が出ています。低炭素社会を目指すことは、今後ますます重要になってくると思いますし、マイカーから公共交通へのシフ



車内に設けられた廃食油回収ボックス

トを具体的にどう進めていくことが効果的なのか、エコロジーとモビリティーマネジメントには大いに接点があると考えます」と山本主任補。帯広市内では路線バスでも廃食油の回収、また台数こそ限られていますがBDFによる運行がされており、こうした取り組みに関心を寄せる他の自治体も少なくないようです。

## 登録者の新規開拓と 委託料圧縮が今後の課題

もちろん課題もあり、委託料（運行経費の助成）を圧縮していくことが重要です。運行エリアが広がった平成18年度で7,413,000円（対平成16年度比16%増）となりました。新規開拓を図り、登録者数を増やすことはもちろん、高齢者だけでなく広い年齢層に利用されるあいのりタクシーとしての存在価値を高めていこうと、アイデアを出し合っているところです。

道見氏は「申し訳ないのですが、特に高齢者の方の運転にはひやっとさせられることも多いので、無理をせず、もう運転は運転手にまかせてください。あいのりタクシーは大正地区と中心部を、平日の朝から夕方まで合計7便で運行し、手頃な運賃で安心、安全な移動が可能。自家用車だけに頼る習慣を見直していただければ」と、呼びかけています。

現在では、やはり散居型の農村部で、長イモが特産の帯広市川西地区でも同様のタクシーが運行されており、反応も上々。大正地区でのノウハウがあり、スムーズにスタートしました。

人の暮らしがある以上、人の移動が発生して当然です。そこには、どんな移動方法が求められていて、また移動手段として二酸化炭素を出す化石燃料だけをこれからも使い続けるのか、じっくりと考える時期にきているのかもしれませんが。帯広市のあいのりタクシーの導入には、たくさんの示唆するものがあるようです。